

中国史上の人種概念をめぐって

坂元ひろ子

1 前史

中国でいわゆる人種が広く意識されたのはそう古いことではない。本稿もまたブレイス論文が指摘するように、「『人種』という概念に対応する生物学的な実体はな」く（本書四三九頁）、「社会的に構築された」とみなすのであり、それゆえ歴史と切り離しては考えられない。ヨーロッパでは一七世紀には中国人を表象する黄色人ということが出て現れたとされ、一八世紀後半のブルームンバッハの五分類説以来、人類を人種分類で理解しようとした。そうした近代の人種分類が中国で流通するようになるのは日本の場合と同じで、本書ムーア論文で示されているような一九世紀ヨーロッパの説に由来し、多くは日本での紹介を通して移入された。

純粹に生物学的差異によつてのみ人間を分類するという人種概念は、遺伝子の解明にともなつて最近ではたしかに影をうすくしてきている。そしてレイシズムも、露骨なものをはなりを潜めつつあるだろう。にもかかわらず、人種主義の存在を誰しも否定できない現実がある。たとえそれが「人種なき人種主義」であったり、「見えない人種主義」であったとしても。大勢でいうと、すでにバリバール（一九九七）らによつて指摘されているように、文化差異主義的な人種差別に移行しているといつてもいいだろう。

こうした推移からも考えさせられるのは、植民地の旧宗主国を中心とする欧米と私が研究している中国とでは、近代において人種概念も人種主義も共有したとはいえず、その出現の経緯と意味においてズレがあるということである。早い話が、たとえば中国では民族観それ自体からしてもともと文化差異主義的な色彩が強かったのであり、それには歴史的な要因があるということである。

古代から今まで連続している「中国」があるという言い方も不正確で、漢族にせよ、諸エスニック・グループが長年、混濁して形成されてきたと考えられる。辺境地帯を植民化して版図をいったんは拡大した漢代頃には漢人とみなされる。それ以前から周辺の他族に対しては、華夷の弁別意識があり、夷狄と区別された華人がいたわけだが、その華人は漢代あたりの漢人に必ずしも連続していたわけでもなかった。その後も周辺民族との抗争があり、分裂と統一、拡大を繰り返し、清代においては史上最大に版図を拡大することになった。つまり歴史を通じて国の規模における大小の差も巨大であった。

王朝時代にあつては、天下、すなわちその当時の人たちにとっての世界は、中心にいる自分たちが本来すべてで、周辺の他族を区別するという意識構造が伝えられてきていて、何よりも文化（儀礼・服装等の習俗や言語・教養など）差別によって自民族中心主義的であった。文化を共有しないものたちは教化されていない、禽獣なみの存在だと見下される、もしくは関心の対象にならなかったのである。たとえば『礼記』等では、異族は「髪を結ばず冠もつけず」、「皮を衣としている」、「身体に入れ墨をしている」、「火を通さず生で食べる」、「穴居している」とか、言語が「百舌の声」に聞こえるといった具合に表象され、經典を規範とした文化生活の有無が問われる。人種を分かつという発想ではなく、特定の文化が人かどうかを分ける、狭い世界での単純な分けかたであった。

端的には、周辺他民族は野蛮人として総称されるときにも、個別の族名にしても、「異種」として「けもの」「虫」^{むしな}「豸」をへんやつくりにもつ漢字が使用された場合が多い。いまでは玉へんや人べんの字に変えられていてもとはたいてい「けもの（へん）」や「虫（へん）」などだったのである。つまり、トータル信仰と関係するといわれてはいても、人間外の動物とか、のちには亡霊をも意味する「鬼」を比喩に用いるというように、対等な生きた人間

とみなされなかった。それは經典のなかでも記述、表現されたことから、王朝がらみの異民族抗争が起こるたびに、敵対する他者に対して、いわば「言語上の記憶」として差別言辭が反復して知識人の文章において蘇生されたのであった。実際には秦漢から清にいたるまで、漢人は屯田経営、強制移民などで辺境各地の少数民族と雑居して開発にあたり、その場合には、例外はあるにせよ、ほとんどの場合は通婚し、融合した。また、宋代以降はエリートを創出するシステムとしての科挙が始まるが、漢字の經典を暗記して漢詩文を作成する能力によって選抜されるわけだから、文化差別とはいえ、当然、非漢族は制度的に除外されるか否かを問わず、王朝を篡奪するか、漢文化に同化する以外には、どのみち排除されることになった。

こうした文化的な差別であればこそ、「華夷の弁」とは、「礼があれば夷狄は進化して華となりうるし、礼がなければ華人も夷狄に変わる」(王 一八八三…三六四)という言も成り立つのであった。これは後述する進化論の影響を受けだしてからの、末期とはいえ満州族が支配した清代における華人の発言であるが、それでもなお、華夷が人種にかえうるものでなかったことはわかる。

ところが、欧米圏では非常に注目されてきたフランク・デイケター著『中国近代の種族観念 (The Discourse of Race in Modern China)』(Dikötter 1992)では、異なる見方が示されている。同書は、感嘆にあたいするほどに豊富な各種資料を駆使した研究であるが、その異同は本書で竹沢の総論が問題提起している、人種概念の起源をめぐる大論争に呼応するものである。本論に入る前に、筆者の立場を明確にするためにも、ここで、すでに拙稿(坂元一九九五…二〇〇四)でもとりあげたデイケターのこの研究に対して、論評を加えておきたい。

エスノセントリズムは西洋にのみあるわけではなく、中国の場合の華夷の別がまさにそうだといえるのであり、その点ではデイケターのいうとおりである。だが、氏の場合の問題は、華夷意識の延長上に中国の近代人種イデオロギーを、「内発的」で特殊中国的なものとして位置づける点である。前近代中国の經書を中心とする古漢籍に、血縁原理や華夷意識に基づく他民族への差別的な記述があるのは、さきにも例示したように事実である。經典をはじめ、先達の作を解釈し、また表現を借りることによって自己表現をするという前近代中国における知の様式から考えて、

ひとたび成立した差別的な表現が常套句として広く長く流通することがあっても、不思議ではない。だがそれをもって近代以降も前近代的差別の自己展開・発展ととらえ、いわば「中国の国民性」論に連なりかねないという方に傾斜するディケター氏の論には、賛同しがたい。

前近代に関しては一次資料にあたってみずから研究していないディケターは、内発論から遡及して、都合のよい前近代研究のみを利用する傾向があり、その論には問題点が多い。

問題点の一端を例示しておく、ディケターは唐代以降、アフリカからも黒人奴隷が船で運ばれてきて「崑崙奴」と称され、唐代の文学にもよく登場するようになったと理解したうえで、こう断定する。西洋の帝国主義の定立以前に、「人種差別の深化における重要な要素」としての黒人と奴隷の同一視が、早い段階の中国でなされていたのだ(Dikötter: 16-17)、²⁰。

だが、もともと黄河源流の地、遙遠の地を意味した「崑崙」は、『旧唐書』『南蛮西南蛮伝』にも記述があり、マレー半島や南海諸島あたりを指す。唐代八世紀では、役所のおかれた広東、広州を窓口として海上貿易が盛んになり、ムスリム商人が南海貿易で活躍するなか、肉体労働者も運ばれてきて、広東周辺の富裕層に買われて家内奴隷として使役されたことは知られている。のちにはアフリカ等からもマラッカなどを経由して運ばれたともいうが、地の利からしても、いわゆる南洋(東南アジア)からが主であつたらう。また逆に、時代が下つてヨーロッパが進出すると、生活に困つた福建人らが東南アジア一帯に苦力として流れていくようにもなつた。唐からのそうした状況が伝奇小説、豪侠小説などに反映したのであるが、水泳潜水術に優れた色黒の人というイメージはおおむね共通する。たとえば、唐の裴鉞「伝奇」「崑崙奴伝」にみえる、主人をいくつもの難題から救う超人、異能者としての「崑崙奴」の磨勒などはよく知られている。

こうした形象から、ただちにのちの黒人奴隷差別と同一のまなざしは見出しがたい。「崑崙奴」の存在は広範な読者にとつて、きわめて限定的で現実性に乏しい他者、すなわち、当時の人びとの「天下」における辺縁で、想像がおよび限り遠く離れた地のエイリアンであつた。だからこそ、伝奇小説好みの超人、異能者の形象に用いられた、とい

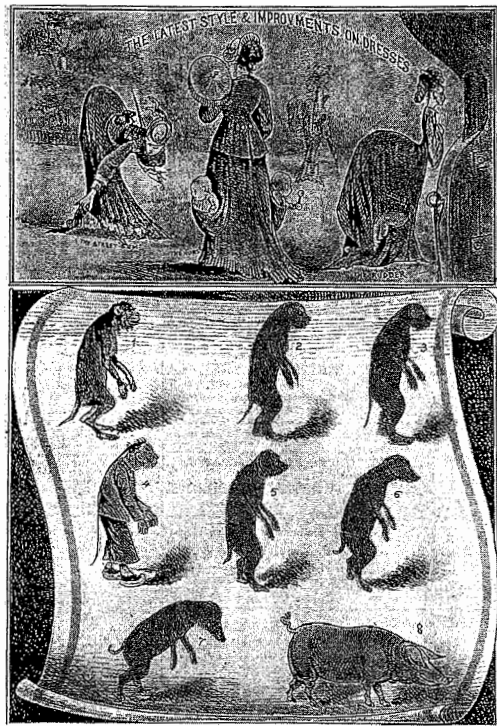


図1 「中国人から豚への進化の過程」 *Wasp* (サンフランシスコ) 1887年1月6日 217頁。

胡垣坤・曾露凌・譚雅倫編【カミング・マン】(村田雄二郎・貴堂嘉之訳, 平凡社, 1997) より。

鬼とよんだりするようにもなった、とある。

アヘン戦争期ではまだしも従来からの華夷意識が強く、「白夷」も「黒夷」同様に見下されたのはたしかである。だが、そこに列強の帝国主義侵略の側が世界観に用いた、社会進化論的思考で序列化した人種分類観をとりこむことで、「白夷」と「黒夷」はそのポジションを決定的に異にすることになる。そのとりこみも、世界の権力構造において、自らに割り振られた想像を受け入れたうえで、その宛先を転化していく、皮肉にも抵抗のための受容、内在化、それゆえ主体化とさえいえるものだった。

「屈辱」による傷としての外国人の身体への妄想は、先述のように早くから欧米からの情報が参照されていたことを、まずおさえるべきである。そればかりでなく、たとえば一九世紀後半からのアメリカでの排華法(中国人移民排

うところだろう。このことからしても、ディケター説には無理がある。

また、氏の指摘では、中国古代に侵略異民族への原理主義宗教的な人種差別が生まれていて、一九世紀中頃まで中国民衆に解剖学的知識が欠如していたために、外見が異なると排他的となり、アヘン戦争期を中心に、黒人・白人の人種ステレオタイプがあらゆる文献に横行し、戦争後には人種ステレオタイプが形成された。一八六〇年代初めまでに「鬼」を用いて外国人を表象したり、黒人を黒

斥法 制定過程における西洋の側の非西洋的の身体に対する妄想(図1)があつてこそ、それを反転させるかたちでの内在化がありえたことを見逃してはならないだろう。こうした想像はつねに一方通行ではありえず、双行的で、「白種による有色犠牲者」といったんはなることで、別の「有色」への加害者ともなりうる。だからこそ、ポール・コーエン(Cohen 1984)がいうような戦後しばらくアメリカの近代アジア研究を支配していた、いわゆる「西洋の衝撃——中国もしくはアジアの反応」という一方的な見方は批判されなければならない。

コーエンの主張する「中国に即した(China centered)アプローチ」手法は、なるほど戦後アメリカの近代中国研究の主流に対する、内側からのラディカルな批判たりえた。ディケターの内発論はこれに依拠している。だが、近代において中国一国史観というのはどだい、無理がある。欧米列強との双行的影響だけでなく、山室信一氏の仕事(山室二〇〇二)が示すように、広い範囲のアジア内においても連鎖があつたし、さらには植民地主義的な想像の転移もあつたことをみなくては、近代をとらえることはとうていできない。歴史性同様に、共時性も排除するべきではない。さもないと、結局、「中国は中国である」というトートロジーに陥るほかに、自己充足的、排他的な史観に流れかねない。

以下、近代に参照された明代の人種観から、一九世紀の紀行文における人種観、さらに人種問題で時代を画した一九世紀末から二〇世紀前半の民国期にかけての中国における近代人種概念の形成過程をおおまかに示しておきたい。中国の人種概念については、じつはこれまですでに拙稿において多々論じている。だが竹沢の総論で示されている、諸地域の人種概念の相対化を意識した共同研究という性格からして、重複する点もやむなしとして、その形成過程をたどっておくこととする。

2 近代的「人種」概念の始まり

前近代の中国において華夷意識が存在したことはすでに述べた。宋の趙汝適『諸番志』でも「蛮」人に対して色黒、食人、拉致して奴隷に売る、といった表象がされており、それは実際に国外で目撃した現地住民に対する表象にも顕著であった。たとえば海洋文明の欠如という見方に対する反証としてよく用いられる明代、一五世紀の永楽帝の命による鄭和の遠征（一四〇五―一三三年）において、鞏珍という人物が随行し、紀行文を記した。その鞏珍の紀行文『西洋番国志』（鞏一四三四）（ここでいう「西洋」はもちろんいわゆる西洋でなく、あくまでも中国を中心にした西洋）にはインドネシア、スリランカなどの住民に対して、偏見にみちた描写がある。たとえば、ジャワ島において「国人」を西アジア系ムスリム、それに広東や福建からの華人と「土人」（原住民）に分類したうえ、「土人は容貌が醜く黒い。髪型は猿なみ、裸足で、神霊を信仰し、〔……〕食べ物汚らわしく、蛇蟻虫蛆であれ、なんでも食べる」（鞏一四三四・八）、スリランカでは「この人たちはみな巢居穴処し、男女とも禽獸同様にまる裸である」（鞏一四三四・二二）、などとしている。

ただこれらは経書などの古典で用いられた夷狄に対する表象がかなり踏襲されていて、その意味でも華夷意識そのものといつてよい。文化差別が根底となっていて、異なる他者は文化なき存在だとみなされている。当時としては特殊な体験をもとにしているだけに、書き手のなかで人種意識というほどのものが形成されているというわけでもない。それは、インドのベンガルについて、「國中みなムスリムで、男女ともに色が黒く、たまに白い人がまじっている」（鞏一四三四・三八）と描写しているが、「風俗は良善」だとしていることから、皮膚の色でただちに未開と考えたのではないことがわかる。中国的風俗からみて許容できるものをみてとっていたのであろう。

その後、万暦年間の一六一〇年、中国に渡って明に仕えたイタリア人宣教師G・アリーニ（一五八二―一六四九、中国名、艾儒略）の地理書『職方外紀』と『万国輿図』が中国における最初の本格的な地理書として刊行された。『職方

外紀』(巻三)では、エジプト人については、さすがに機知があつて科学に優れるとみなす。一方で、地中海沿岸より内陸部のアフリカ人については「性格が犷猛で教化できない」とか、「きわめて愚かで義理が分らない」、人肉も食べ、「生で食べるので歯が大牙のように鋭利」とかが漆黒の皮膚色であることともに記される。

そうした偏見は、のちの一九世紀前半の宣教師による新聞のはしりとしての情報誌にまで伝えられている。そしてそれら情報誌、とりわけ、文明を伝えるために中国人における他民族への「蛮夷」扱いを改めさせようという意図で、一八三三年にギュッラフ(K. F. August Gutzlaff)によつて創刊された『東西洋考毎月統記伝(Eastern Western Monthly Magazine)』(一八三八年停刊、略称『東西洋考』)などが、中国知識人たちの人種観念形成の資源となつていったのである。『東西洋考』では、たとえば「パプアの土番は蛮であり、各人が妻を娶ろうとし、人頭で結納をするため、好んで人を殺し、頭蓋骨を宝物とし、まるでアフリカ人のようであり、顔は黒く、凶暴で利のために他人に危害を加えようとす」(『美洛居嶼等与吧布阿大洲』『東西洋考毎月統記伝』道光癸巳〔一八三三年〕九月、三七頁)と記し、アフリカともども、皮膚色の濃い人たちを恐ろしい首狩り族とみなす露骨な野蠻視で、自らの他民族に対する「蛮夷」扱いを改めようというふしはみられない。

一九世紀初頭、海洋貿易商人に雇用された嘉応(広東梅县)出身の謝清高が口述し、同郷の楊炳蘭が記録した『海録』(一八二〇)には、おもに諸地域の習俗、産物などが記され、マレーのムスリムや福建や広東からの移民、ヨーロッパの植民地経営ぶりなどへの関心が読みとれる。当時、マレー一帯の航路の中心的な停泊・貿易港として栄えたマラッカについて、「土番」(現地の未開人、原住民)は「無来由(マレー)種類」で「民情は兇悪、風俗は奇異」(謝一八二〇:一一〇)だとする。他の地域でもマレー系は泥棒・強盗を生業とする、と描く。アフリカにいたっては、「人民は愚か、漆のように黒く、毛髪はみな縮れている」(謝一八二〇:四四)とし、「西洋に奪われた」諸国はかつて民を掠奪して各国に奴婢として売った、としている。身体特色などの外見と負の性格がより強く結びつけられてきていることがわかる。

世界地理への認知が高まるきっかけはやはりアヘン戦争にあった。その戦端をひらくアヘン処分断行の任にあつた

た大臣として知られるものの、むしろ世界の情報収集に自覚的な最初の政治家であった林則徐は、地理書『四洲志』を編纂している。林は敗戦で左遷される際に同書を友人の魏源に贈り、それをもとに、魏源の有名な『海国図志』（五〇巻本一八四二年・増訂六〇巻本一八四七年・一〇〇巻本一八五二年刊）が編纂された。すでに拙稿（坂元一九九五・二〇〇四）でも指摘しているが、広東学界における西洋学の蓄積を背景としつつ、情報源は西欧人である。

魏源においては、教化富強のすべをもたず、「黒奴」の拉致売買をするばかりのアフリカという認識をもち、その原因として列強の分割支配を考えていることからいっても（巻三三、小西洋、開国後の中国のとるべき道を考えるうえで参考とすべきだ、という意図がうかがわれる。同時に、ナイジェリア付近の地域について、「土番は宗教を信仰せず、入れ墨をし、革衣を身につけ」ていて、「ことに野蛮な」部落では、「敵の歯をとって輪にし、首にかけて見せびらかす」（巻三六、小西洋・中利未亜洲）などとも記し、富強の度合いと華夷の別とをあわせての「野蛮」視が明らかになってきている。

その『海国図志』はなによりも、既存の多くの地理書の該当部を付す方式で増訂を重ねたため、たとえば『東西洋考』や『職方外紀』をはじめいくつもの地理書からの引用が並び、どれも限られた情報にもとづくだけに、色黒、奴隸、「愚か」、「食人」などの文言が反復することになった。こうして作者の意図ではなくとも、読者には黒人すなわち愚かな野蛮人というステレオタイプの原型をうえつけるはたらきをすることになったのである。

『海国図志』と同様に日本に伝えられた、高官、徐繼畬の地理書『瀛寰志略』（徐一八四九）になると、アフリカ人に対しては「土番は黒く醜い容貌、豕ぶたや鹿のように無知」（徐一八四九・巻八「阿非利加西土」、按語）と相変わらずの表象ながら、外交上では同じくまだ「夷狄」扱いだった欧米人に対する評価には、対照的な変化がみられる。中国の中原に似たヨーロッパの中央部に住み、「人びとは聡明闊達で西洋では貴種だとみなす」（徐一八四九・「欧羅巴」部、巻五「日耳曼列国」、按語）と、ゲルマン系を中華扱いしている。本書チャンナ論文にみえる「アーリヤインド人説の神話」構築の意識と照らし合わせても興味深い。これらの情報もまた欧米からのものが基本で、実際、福建巡撫ともなった徐繼畬は廈門に滞在中以降、アメリカ人宣教師らから地図や関係情報を得て同書を執筆していたのである。

一九世紀後半には大量の苦力がアジア一円に流れていき、移民も同時に増え、さらにアヘン戦争後に正式な外交関係が生じたことで、海外へ赴く知識人もでてきた。すでにヨーロッパ中心主義的な人種観を極端なまでに内在化したかのような例として、曾國藩の幕客から出世コースを歩んで英・仏・伊・比（ベルギー）の四方国への出使欽差大臣となった薛福成の自らの見聞にもとづく人種言説をあげうる。

サイゴン・シンガポール・スリランカを経由する航路で、原住民を見た薛福成は一八九〇年の日記に以下のように描写する。「土民はみな外観が醜悪、鹿や豕と異ならず、あいかわらず気風が開けず（榛莽）、見かけたベトナム人・ミャンマー人そしてインド・マレー・アラブの人たちにしてもいづれも、顔つきはみな真つ黒、背が低く愚かで、教養の高い中国人民や白くて背の高い立派な体格の欧州各国の人と比べると、その差は雲泥の差に止まらない」（薛…卷一、光緒一六「二八九〇」年正月二八日の条…一二）と。その原因は何か。人物の精華が集まる温帯とは異なり、赤道下の南洋諸島では「精気が漏れて、年中収斂する時がない」ため、気力も体力も失って衰え、蒙昧となるのだ、と。このように、薛福成は地理環境決定論的な立場で自己の人種観を築いたのである。

ヨーロッパへの航路途上、多くの華人が住みついてきた東南アジアの原住民を醜く劣つたものとみる、人種のランクづけによる自己確認のあり方をここにみるることができる。人種的にヨーロッパ人がアフリカの黒人を対照させて自己確認をするような地政学的な位置にはなかった中国人にとって、この東南アジアの原住民こそ、リアリティをもつた他者、自らをヨーロッパ人と同等視する対照存在としてうってつけであつたのであろう。「豕や鹿なみ」という、中国の『礼記』や『孟子』といった古典からとりだした非人間化の比喩によってステレオタイプが配当されていくことになる。すぐれた「白人」という意識と表裏していることから、白／黒の皮膚の色の対比を際だたせるかたちで人種分類が優劣のランクと重なりあわせられつつあることが分かる。

それでも、この段階での人種観念は、西洋との接触において限られた立場にいる人たちによって抱かれたもので、まだ時代の思潮のキー的役割を果たすという状態ではなかった。そうした段階を経ることで、常套句による華夷的文化差別が西洋で作られた人種分類に接合していったものと、とらえうる。